死に臨む態度

上田三四二
miyoji ueda

春秋社

死に臨む態度

上田三四二

春秋社

上田三四二（うえだ　みよじ）

1923年、兵庫県に生まれる。京都大学医学部卒業。歌人、文芸評論家、作家、1989年没。

主著に歌集『黙契』『雉』『湧井』『遊行』『照径』『鎮守』『上田三四二全歌集』、評論集『斎藤茂吉』『西行・実朝・良寛』『この世　この世』『島木赤彦』『徒然草を読む』『短歌一生』『無為について』『眩暈を鎮めるもの』、創作集『深んど』『花衣』『夏行冬暦』『惜身命』『祝婚』などがある。

死に臨む態度

一九九三年二月二五日　第一刷発行

著　者　上田三四二
発行者　神田　明
発行所　株式会社 春秋社
東京都千代田区外神田二-一八-六
電話　〇三-三二五五-九六一一（営業）
　　三二五五-九六一四（編集）
振替東京　八-二四八六一
萩原印刷／寿製本
©上田露子　Printed in Japan
ISBN4-393-44113-3〈定価はカバー等に表示〉
落丁・乱丁本はお取り替えします

目

次

I 病んで思うこと

病後の読書 7
旅仕度 12
贈られるのはこころ 17
病んで思うこと 19
日常の割目 27
書見器 32
矮鶏と書見器 35
死に臨む態度 39
病院通い 46
閑暇の夢 50

II 散歩の道筋にて

水鉢 59
花二題 62
秋津まで 66
銀杏 68
通い路 71
水辺の辛夷 75
散歩の時空 78
声 81
自転車 84
月代 87
四十雀と雀 91
尾長の帰還 93
裏隅 96
沙羅双樹という樹 99
地上一寸ということ 104
散歩道 108

III 胃の腑の鳥獣魚介

食べもの雑記 113
復酒絶煙 118
歩く、食べる、見る 122
くさい卵 126
西瓜 128
殺生について 130

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

Ⅳ 来し方の追憶

三人従兄弟 139
療養所今昔 142
自然について 145
誕生日 153
共学 156
予言 161
手の話 165
兄事四十年 169
中風 174
ある年の盆 178
物の言葉 182

Ⅴ 花月に託す夢

女という自然 193
針の穴から 197
言葉について 202
茶の間の奈落 205
仏法と政道 209
雨月 212
宣長の墓 217
立春望月 222
残虐について 227
書展 233
歌会始のこと 237
耳のよろこび 241
正月の読書 244

静謐な諦念の世界——加賀乙彦 249

装丁――本田　進
挿画――米澤恵子

I 病んで思うこと

病後の読書

入院して手術が必要とわかったとき、それは十九年前の病気の再発ではなかったが、同じような質のよくないものであることはほとんど確実であったから、私はいやでもこの世の仕切りの準備をせざるを得なかった。去年の夏のことである。

前のときとちがって、六十になったいま――欲を言い出せば切りはないが、自分の一生はまずこんなところかと寂しい諦めのようなものが湧いた。そして著書の校訂にかかった。

私のような世間の職業と妥協しながら文学の道を歩いてきた中途半端な者にも、数えてみると二十数冊の著書がある。ほぼ十年毎に出してきた四冊の歌集、ここ数年のあいだに書いた三冊の創作集、あとは評論やエッセイの類で、そこには三十代の総決算ともいうべき『斎藤茂吉』のような思い出の本もある。校訂といっても本文を改めることは

しない。気がつくたびに直しておいた誤植を確かめ、疑問のままにしておいたものは調べて断をくだすだけだから、作業はさほど手間どらない。こんなことをして著作集の出るあてはあるのか——そういう疑念には目をつぶって、することだけしておけばあとは任天、任運、そう言ってきかせて、作業を終った。また、出すばかりになっていた四番目の創作集と、もう一篇加えたいのを断念してまとめた評論集の二冊の予定の本については切抜きを読み返して最後の手入れをし、出版社に渡した。ほかに、前の歌集のあと三年半にわたる短歌作品がある。それも遮二無二まとめて、あとがきのかわりに六十年間の略年譜をつけて、関係の編集者に後事を托した。

まだあった。約束の講演を断り、選歌を断り、小さな連載をふくめて文章を断り、選考委員を断った。そのために幾通も手紙を書き、汗しながら電話を掛けた。

そういう、先に向けての肩の荷をすべておろしてみると、譬えようもない身の軽さである。心は空になった。入院をまつあいだ、私はふだんのとおり毎日の散歩にも出たが、風が吹くと身は紙のようにただようかと思われた。この身の軽さを持し、この心の空にあそんで、しかも余命なきいまの運命をもう何年か先にのばすことができないか。切に、そう願われた。一日二十四時間、その一秒一秒がそっくり私のものだった。そして私にしなければならないことは何もなかった。死を待つよりほかに。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

右の片付け仕事のあいだ、資料の必要から私はしばしば書庫に入った。大した蔵書ではない。それでも、六十年を生きてきたのである。思い出の本があり、恩恵を受けた本がある。欲しくて買ったのに、そのままになっている本がある。何時かかならずと思いながら、何時まで生きるつもりなのか、買い込むばかりで雑事に追われ、読む暇を見出せないまま埃をかぶっている本が、どっさりある、かどうか、そこは主観だが、そういう本がやたら目につき、本の方から切ない瞬きを返してくるかのようだった。

折口信夫全集のノート篇十八巻を読んでみたいと思っていた。柳田国男も全集で体系的に読むつもりだった。若いころ端本を古本屋であつめて熱中したヴァレリー全集は、新装改訳のものでもういちどしっかり辿ってみたかった。ベルグソンも『物質と記憶』以後への目配りが手薄である。ベルグソンに関係づけて、いまは読まれることのない西田幾多郎への郷愁があった。いい訳があるのに、私はプラトンをまるで読んでいない。

なにをしていたのだ、お前は。棚の上のまとまった著作集を一瞥するだけでも、――こういった、これだけではとうてい言いつくせない、悔しみがある。著作の大概を読んだといえるほどのものは、鷗外、漱石を別にすれば茂吉と赤彦と小林秀雄、それに唐木順三くらいのものではないか。

荷風もながく心にあったが、『雨瀟瀟』や『墨東綺譚』を見てしまった目には、あと

のものにさほど食指が動かないで今日にいたっている。『源氏物語』をもっともくわしい評釈で読んで、宇治の途中まで来ていたのは、あと一息の心残りとは言え、やはり満足すべきことにちがいなかった。

捨て、捨て、捨てた心の果てに、なおのこる未練というものにつき当った気持に私はなった。美女の肌をきわめ、美味の数をつくしたいといった願いは、叶わぬと知ってか、もともと嗜欲にうすい質なのか、それとも老いの境に歩み入ったせいだろうか、私にはなかった。仕事の欲もいまは捨てていた。わが甲羅に見合うだけの穴は掘ったというかすかな慰めさえそこにはあったと言おう。ただ、読まずして別れてゆく本にだけは、知ることなしに過ぎてゆく女への思いもかくやとばかりあらぬ連想をさそう、愛惜の念があった。

読んで、何に役立てようというのではない。私はただ知りたかった。世のすぐれた人達がどのように考え、どのように生き、身につけた知恵のかぎりをどのように表現しているかを、味わいたかったのだ。

病院へは読みさしの源氏の評釈などのほか、本は持込まなかった。読まないつもりだった。また読めるような状態でもなかった。術前の手をかえ品をかえて繰出される検査の苛酷さは、手術に多くの期待をよせていない打ちのめされた男をいっそう打ちのめ

すに充分だった。怨んで言うのではないが、私は存分に叩いて火にかけるテキ肉のように、伸びて、手術台に運ばれた。

予定を超えて十一時間にも及んだ手術のあとの、ながい、そして起伏に富んだ経過については、言わないでおく。三カ月たって退院し、自宅で病後を養うようになってからも、体の回復はなかなかだった。間もなく一年になろうとするいまも、すっかり、というわけにいかない。それに先が楽しみという病気でもない。私は生きようと焦りつつ意外に早く死んでしまうよりは、寿命はそれと同じでも、死ぬ死ぬと思い定めながらまだ生きていると知るかたちの方が好きなので、わが生はこの月かぎり、来月かぎり、今年かぎり――そんなふうに自分に言ってきかせて、希望を抱くことをみずからに禁じて日を送っている。

そのような日々のなかで、頭の回復は体に増して遅く、どうなることかと思われたのであったが、近頃になって、かなりむつかしい本もこれまでどおり読めるようになった。「病後の読書」と題をつけて書いてきたが、読書はこれからである。そのこれからもいつまでつづいてくれるのか、まこと、はかない。けれどもあの入院をひかえての日々、書庫にあって胸にひびいた愛惜の念をおもうと、一日は千金というもおろかである。よろしく書林のかげにあそんで、呼出しのあるまでのしばらく、読書三昧という現世の愉

楽に身をまかせたいと願い、現に多少の実感を得つつあるがごとくである。

（「海燕」一九八五年八月号）

旅仕度

旅仕度のつもりでベルグソンを読んだ。

どこへ、どう旅立とうというのか。旅、などという美しい言葉では覆うことのできないおそろしい境に向かっての旅立ちだけに、心と身に関するベルグソンの犀利でまた柔軟な直観が多少なりとも慰藉をもたらしてくれないか、そう思って白水社版の旧い全集でその大体を読んだ。

死なば野分生きてゐしかば争へり　　加藤楸邨

一息の駐れば泥土たらむのみ時の間すらや惜しまざらめや　　吉野秀雄

このあたりが日本人の平均的な死生観であろう。死後は無いと観念している。国をこえて、大方の現代人の胸の内もこのあたりと言えそうである。身体の棄却は精神の廃絶か。それとも身体ののちになお精神に望みはあるのか。まず見込みがないとするのが常識の健全さというものだろう。平均的な日本人の一人である私は、二十年前の大患に際して「死なば野分」とみずからを観じ、後世頼まぬ覚悟の上に、「一息の駐」るまでの世の救抜を『徒然草』の「ただ今の一念」なる心術に托そうとした。このたび、六十歳をすぎて再度の厄に遭い、生死を包含するより広い視野が欲しくなった。進歩とは言えないかもしれない。だが退歩とも言えまい。要するに勝手なので、当人としてはじたばたしているにすぎない。

母を見送ったとき、当時の村の風習として経帷子に手甲脚絆を着け、杖を添え、異界へと渡す川舟のために六文銭を用意して、しずかに土に納めた。墓地を背後にもつ寺の閻魔堂に地獄図があって、亡者はみな五体備わって責苦は身体上の責苦であり、極楽図では、蓮池にあそぶ死者たちは清浄の衣をさえ着けていた。浄土教では死は身体の棄却と考えられていないらしい。村人たちがその教えをどこまで真に受けたか、しらないが、現在の焼場にみるすさまじくもまたあっけらかんとした廃棄の処理は、地獄極楽図の成立を無効にしてしまった。キリスト教の天国は霊たちの場所だから身体はないとし

て、それをイメージに描き出すことはできそうにない。顔のない個性とは何だろう。ダンテの手法を異端的ということはできない。

一体に既成の宗教によらぬ安心立命の道はあるのだろうか。

人間の心のなかには、黄泉（よみ）的な死後観と浄土（天国）的な死後観との二つがあって、対立しているように思われる。黄泉的な死後観とは身体よりみた死後観で、イザナギが目にした黄泉平坂（よもつひらさか）のむこうのイザナミの姿をもって象徴することができる。浄土的な死後観とは魂よりみた死後観で、極楽図を想像したいが、そこにおける死者たちはことごとく透明で、つまりは姿なき霊魂となって嬉遊している。前者を身体よりみた頽落的死後観、後者を精神よりみた光明的死後観と呼んでよいだろうが、両者を単に対立的にみるだけではなく、綜合しうるような視野は得られないものだろうか。

こういう比喩はどうか。われわれは可視光線を認識の尺度として生きており、それが現世というものだが、死は現世の尺度を超えるものであるゆえに可視光線は役立たず、可視光線以外の波長をもって認識しようとする。そこで、いま波長を赤色の外に移して赤外線という長い波長に同調せしめるとき、そこにあらわれるのが腐敗する身体、廃棄された身体としての黄泉的な死後世界であり、逆に紫色の外側、紫外線という短い波長に同調せしめるとき、廃棄された身体の眺めは透過されて浄土的死後世界があらわれる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.